氏名	都築 鉄平
学位の種類	博士（言語科学）
学位記番号	人博甲第 13 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 21 日
論文題名	日本語における「タ」と「テイル」の対立 ― 意味論・語用論からの考察 ―
審査委員	主査（教授）青 柳　宏 （教授）阿 部　泰 明 （教授）坂 本　正 （教授）定 延　利 之（神戸大学）

１．論文の内容の要旨

日本語において、タは過去というテンス（時制）、テイルは継続相というアスペクト（相）をそれぞれ表す形式だと一般に考えられている。本論文は、典型的なテンスまたはアスペクト的用法だとは考えにくいと先行研究で指摘されてきたタやテイルの用法（たとえば、探し物が見つかって、それが眼前に存在するにもかかわらず、「あ、あった！」と言う「発見のタ」といわれる用法や太郎の職場の上司が出勤簿を確認して「太郎、昨日休んでる」と過去のできごとをテイル形で言うような場合で、それぞれ、「あ、ある！」（非過去形）、「太郎、昨日休んだ」（単純過去形）とは言いにくい）を詳細に検討し、これらの非典型的な用法も「設定時(reference time)」の導入の仕方に特徴があるだけで、典型的な用法となんら変わるところがないと結論づけている。

本論文の構成は、つぎの通りである。まず第 1 章で問題の所在と研究目的を明確にし、第 2 章でテンス・アスペクトの形式を決定する Reichenbach (1947)、工藤(1995)の「できごと時(event time)」、「設定時(reference time)」、「発話時(speech time)」からなる時間関係図を修正して、筆者独自の「時間関係算定プロセス」を提案する。第 3 章では、「記録・痕跡」や「様子」からできごとを把握したことを示すテイおよびタの用法を詳しく検討し、できごとを間接的な証拠から把握した場合は、証拠を観察している時に設定時(reference time)が追加されるという「間接的把握の原則」を提案する。第 4 章では、いわゆる「ムード的なタ」や「発見のタ」を含むタのさまざまな非典型的用法を綿密に再考察したうえで、一見一括りにはしがたいようにみえるこれらの多様な用法に通底する原則として、できごとに関する情報を取得してからその有効性が失われるまでの間に設定時(reference time)を追加するという「情報の有効性の原則」があると主張する。第 5 章は、結論と今後の課題である。

２．論文審査の結果の要旨

タとテイに非典型的と思われる多様な用法があることは、多くの先行研究で指摘され、議論されてきたことであるが、本論文は、これらを「間接的把握の原則」や「情報の有効性の原則」という斬新な切り口で典型的なケースに再統合してみせたという点で非常に独創性が高い。また、議論の展開の仕方も概ねスムーズで十分に健全性が認められる。さらに、経験科学たる言語学で重要な用例の提示の仕方についても、用例の微妙な容認度判断を読者に明確に示すために、随所に場面設定上の工夫がみられ、議論に説得力を増すことに大きく貢献している。くわえて、先行研究では触れられることのなかった「現在過去完了」とでも呼ぶべき言語現象の存在を指摘し、かつ、この現象が本論文が提案する「時間関係算定プロセス」によって自然に説明されることを示した点は高く評価できる。

ただ、テイの非典型的とみられる用法とエビデンシャル（すなわち、話者が如何にして発話内容に関する情報を得たかを示す文法形式）との関係を示唆しながら、テイの基本的用法は話者ができごとを観察したことを示すエビデンシャルであるという代案（定延(2006)など）との違いを十分に吟味していない点、テイやタが接続する動詞のうち非状態動詞の語彙的アスペクト（すなわち、活動、達成、到達）の違いが述語全体の時間的解釈に及ぼす影響を必ずしも議論し尽くしていない点、などが今後の課題として残るであろう。

本審査委員会は、このように改善の余地はあるものの、総合的にみて都築氏の論文の学術的価値は高く、博士論文として認められる水準に十分に達しているという判断を全員一致で下した。

平成 26 年 2 月 21 日

主査（教授）青 柳　宏

（教授）阿 部　泰 明

（教授）坂 本　正

（教授）定 延　利 之（神戸大学）